

大島海洋国際高等学校在り方検討委員会
(第3回)

平成30年2月14日

東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課

第3回 大島海洋国際高等学校在り方検討委員会

場所：第二庁舎31階 特別会議室25

【事務局】 それでは、少し時間が早いですが、開会に先立ちまして、大島海洋国際高等学校在り方検討委員会設置要綱第9条に基づき、本日の委員会は公開とさせていただきます。傍聴人の方は合計9名、記者の方は0社となっております。

それでは、定刻になりましたので、委員長、お願いいたします。

【出張委員長】 こんにちは。非常に本日はお忙しい中、御出席いただきまして、本当にありがとうございます。

定刻より若干早うございますが、第3回目の大島海洋国際高校の在り方検討委員会を開催させていただきます。

前回の議論では、教育理念などについて、委員の皆様から御意見を頂戴しました。そこでは、学校としてどのような生徒を育成していきたいのか、そのためにどのような教育を行うのかといった考え方を整理いたしまして、誰もが理解できて、具体的な学校像が描けるよう、わかりやすく整理すべきとの御意見を頂いております。

また、大島のみならず、東京や我が国が擁する離島の振興を図るべきといった御意見も頂戴したところです。

さらには、海外、海洋を通じた国際的な視点に立った教育を全ての生徒に実施していくという内容を、教育目標に盛り込んでいくべきではないかといった御意見も頂戴いたしました。

それで本日は、前回やりました、まずは教育理念などにつきまして、事務局の方で御意見を頂いた中で修正した最終案を御確認いただきまして、決定していただければと考えております。

その後、育成すべき生徒のキャリア像と、教育の方向性や学校の基本的な枠組みなどについて、御議論を頂きたいと思っております。

なお、第2回の議事録につきましては、事務局から各委員の皆様へ内容の確認を行った上で、既にホームページ上に公表させていただいておりますので、この場にて御報告させていただきます。

それでは、まず事務局から、本日お手元の配付資料の説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

【事務局】配付資料について、説明させていただきます。

本日の検討委員会第3回次第が、A4、1枚、縦でございます。

続きまして、次第の中段以下に記載がございますとおり、配付資料といたしまして、資料1「大島海洋国際高校の教育理念等の検討及び最終案」が、A3横1枚。

資料2「海洋産業、海洋人材、離島振興等の現状や関連施策に基づく育成すべき生徒のキャリア像」がA3横1枚。

資料3「生徒のキャリア像に基づく教育の方向性等（案）」がA3横1枚。

資料4「学校の基本的な枠組みや引き続き検討が必要な事項（素案）」がA3横1枚。

最後に、参考資料といたしまして、「他府県高校の学科別生徒数」がA3横1枚でございます。

説明は以上です。

【出張委員長】何か過不足等ございますでしょうか。大丈夫ですか。

それでは、一番上にある次第に従いまして、議事を進めてまいりたいと思います。

2の議事、（1）大島海洋国際高等学校の教育理念、教育目標について、事務局から資料1を基に説明をお願いいたします。

【事務局】議事に関する資料の御説明をさせていただきます。

資料1を御覧ください。

左の列から、平成17年当時の理念など、表頭を御覧いただきたいと思います。平成17年当時の理念など、第1回検討委員会での御意見、それらを踏まえた教育理念等の案、それに対する第2回検討委員会での御意見、これに基づいた作業部会での検討状況。

一番右の列は、最終的な教育理念等の案を記載してございます。

右から3番目の列を御覧ください。第2回の議論の中では、一番上の丸にございますとおり、学校でどのような生徒を育成すべきか。そのためにどのような教育を行うのかなどをわかりやすい表現で整理すべきといった御意見、また、上から5番目の丸にございますが、海などをフィールドとして世界で活躍していく生徒を育成するということがわかるようにすべきといった御意見、さらに、下から四つ目以降にございますとおり、離島や地域振興、海洋を通じた国際的な内容に関して、教育目標に別途追加すべきといった御意見を頂きました。

右から2番目の列、上から二つ目の丸を御覧ください。第2回での御議論に基づきまして、作業部会で検討を行ってまいりました。

前回の御議論において「海を通して世界を知る」という言葉を教育理念として昇華したらどうかという御意見があり、委員の皆様から御賛同いただいたところでした。

これに対し、作業部会におきまして、「世界を知る」という言葉だけでは、知識を得ることにとどまってしまうのではないかと、委員からもあった、海をフィールドに世界で活躍するというイメージがでないのではないかとといったような意見が出されました。

そこにございますような幾つかの案を基にした議論を、その結果、行いました。

その結果、「海を通して」では将来、海を舞台に生きる者としての尊敬の念などが出ないなどの意見から、「海に学び」としまして、「世界を知る」の部分では、しっかり知識を得て、探求し、解決していくことで世界に貢献するというイメージが湧かない等の意見から、「未来を拓く。」とさせていただきます。

また、学校を舞台とした前半部分と、将来をイメージした後半部分を際立たせるよう、間に句点を入れさせていただいております。

また、教育理念の説明をわかりやすくすべきなど、委員と同様の意見も出されました。その結果について、本日、教育理念等の最終案として、一番右の列にございますような案にまとめさせていただきます。

教育理念は先ほど御説明させていただきましたとおり、「海に学び、未来を拓く。」とさせていただきます、この教育理念に込められた意味をぶれずに、誰もが同じ意味として理解できるように、また、対外的にきちんと説明ができるよう、以下四つの文章にて説明をしています。

一つ目のポツでは、理念に込めた大きな育成すべき生徒の将来像を説明しています。

また、二つ目のポツでは、そのために学校が実現すべき大きな教育像を説明しています。

また、三つ目のポツでは、学校教育に関わる全ての関係者に必要な、共通の考え方を説明しています。

また、最後のポツでは、教育理念とその意味を理解し、大島海洋国際の教職員として理念達成のために教育目標を実践するという宣言を説明しています。

また、その下の教育目標では、前回までの五つの教育目標に加えまして、大島を初めとする地域離島振興についての内容、地域だけでなく世界に貢献できる人材育成という内容の、二つの教育目標を追加してございます。

資料1の説明は以上でございます。

【出張委員長】ありがとうございました。

ただいま事務局から、前回の検討委員会及びその後の作業部会で検討をされました、教育理念などの最終案について、説明がございました。

本日はまずこの教育理念等について、御確認を頂きたいと思います。

何か御質問、御意見等、ございましたら、よろしくお願ひいたします。

いかがでしょうか。

前回、御議論いただいたことをベースに、端的にわかる教育理念としようとしたらどうだということ、「海に学び、未来を拓く。」と。キャッチフレーズにもなって、でも、まとめてくださったんですけれど。

その下の部分は、その説明文みたいなものですよ。これの、込められたことが今、事務局からあった説明の中で、生徒、それから、具体的に何をやっているか、教職員、それから、地域の方にもわかってもらうとして、教職員のやるべきことという4点があるんですけれども。

どうぞ、お願ひいたします。

【初宿副委員長】私の方から、山寺校長の御意見を少し伺いたいと思っているんですけど、これまで大島南高校に始まり、大島海洋国際高校で大切にされた言葉、この「海を通して海洋を知る」というスローガンをずっと持ってきていただきました。

恐らく現在の高校にもなじんでいる言葉だと思うのですが、この大切にされた言葉が今後、もし東京都教育委員会で「海に学び、未来を拓く。」というように決まっていったときに、これまで子供たちに対して伝えてきた、この「海を通して世界を知る」といったキャッチフレーズめいたものについて、学校としては今後どうなっていくだろうとか、何か校長先生としてのお考えがあれば、お聞かせいただければと思います。いかがでしょうか。

【山寺委員】海洋国際を開校して12年たつわけですけれども、これまでのスローガン「海を通して世界を知る」、これは一定程度の定着をしております。

今回、前回の第2回の検討会で、それをスローガンから教育理念へというような話があり、作業部会の中では、事務局の繰り返しになりますけれども、「世界を知る」というその知識を得るというところではなくて、もう少し生徒たちが卒業後に発信していくという、そういう文言を考えたかどうかということで検討した結果、「海に学び、未来を拓く。」という方向、こういうフレーズになりました。

このことについては、学校の水産科の、海洋科の教員とも一定程度の議論をしております

て、この方向でいくということで、教員の方も理解を持っておりますので、これまでを踏襲した上に、更に発展的に学校をしていくという意味を込めて、こういうフレーズでいきたいというふうに思っています。

【初宿副委員長】確認ですけれども、その学校の先生方におかれても、また、恐らく子供たちにおかれても、こういったフレーズというのは、最終案とした教育理念については、恐らく定着していくであろうというように受け止めていらっしゃるということで、よろしいのでしょうか。

【山寺委員】はい。定着していくと思います。

【初宿副委員長】ありがとうございます。

【出張委員長】よろしいですか。

ほかに、いかがでしょうか。質問、御意見でも結構ですけれども。御感想でも、どうですかね。保護者代表の田島委員、いかがですかね。

【田島委員】今は特にないですけど、多分この「未来を拓く。」というのが後の話につながっていくんだろうなと思っているので、それを聞いてから。

【出張委員長】そうですか。理念的なところなので、よろしいですかね。

いいですか。

【丹羽委員】はい。

【出張委員長】それでは、教育理念と教育目標を決定したいと思います。

特に、訂正もないという形で、これで決めさせていただければと思います。ありがとうございました。

それでは、今日はこれからが少し御議論いただくところです。次第の2番目、(2)です。育成すべき生徒のキャリア像と教育の方向性についてに移りたいと思います。

先ほどの大島海洋国際の教育理念について、御意見いただきましたが、作業部会においても育成すべき生徒の具体的なキャリア像と教育の方向性について検討しております。

まずは、作業部会での検討状況について、事務局の方から説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

【事務局】では、議事(2)の説明といたしまして、資料2、資料3と連続して説明をさせていただきます。

前回、第2回の検討委員会におきまして、作業部会で検討中のキャリア像をごくごく簡単

に御説明させていただきましたが、今回の議題（２）の検討に当たりまして、第１回の委員会で御説明させていただきました生徒、保護者の方々のニーズも踏まえた上で、社会のニーズはどのような海洋人材を求めているのかといった視点で、最新の情報を基に生徒のキャリア像やそれに基づく教育の方向性などについて、検討してまいりました。

資料２を御覧ください。左上から、平成30年度からの第３期海洋基本計画策定に向けた総合海洋政策本部参与会議意見書及び同意見書別紙「平成29年度海洋人材の育成等P T報告書」の一部抜粋などを記載しております。

真ん中より少し右に「エスディージーズ」と読みますけれども、SDGsアクションプラン2018、一番右に、「３つのシティ」の実現に向けた政策の強化、こういう都の施策に関するものの三つの関連する資料をまとめてございます。

まず、一番左の第３期海洋基本計画に関する部分をご覧ください。最初の丸、次期計画における主要テーマの中に四つのテーマがございますけれども、四つの主要テーマの四つ目に、海洋人材の育成等ということが掲げられております。これについては、詳しく後ほどご説明いたします。

また、三つ目の丸でございますけれども、離島の振興や都が我が国の４割近くを超えるEEZの開発などについて記載がされております。先ほどのところに戻りまして、海洋人材の育成に関してですけれども、下の破線の欄をご覧ください。

主要テーマの一つである、海洋人材の育成等に関しましては、破線で囲ってございますとおり、参与会議における海洋人材の育成とP Tで議論がなされまして、P T報告書として取りまとめられております。その一部を抜粋、記載しておりますので、御確認を頂きたいと思っております。

最初の丸にございますとおり、海洋開発の基礎となる人材として、いまだ産業とまでは至っていない海洋資源開発分野であるとか、こうした産業開発に関わる海洋政策の策定に係る人材などが必要とされています。

また、二つ目、三つ目の丸で御確認いただきたいのですが、造船業、船用工業に関わる人材や、船員の育成と確保について触れられておりまして、特に、三つ目の丸、船員では、若年船員の確保・育成が重要であるというようにされております。

また、四つ目の丸では、船員と同様に高年齢化が進む海洋土木の担い手の確保・育成が重要であるとの記載がございます。

また、五つ目の丸でございますが、我が国の食用魚介類の現状に触れた上で、水産業及びその関連分野の人材の確保が必要であると記載されています。

このように、海洋エネルギーや海洋における新技術の開発、さらには海洋政策を進めるための人材、また、船に関わる人材、海洋土木の担い手、水産業やその他関連分野の人材といった、多様な海洋人材の育成・確保が必要であると結論付けられてございます。

その右のSDGsアクションプラン2018を御覧ください。ここでは、海洋基本計画の策定に向けた参与会議の意見書の内容に合致する部分も、非常に多く記載がございます。その中でも、一番下のところを御覧いただきたいのですけれども、マイクロプラスチックを含む海洋ごみ対策の推進というものがございます。

海洋汚染等を引き起こす海洋ごみ対策の推進について、左の意見書の内容にも重なる部分等は多々ございますけれども、海洋等の環境保全を進めることが、持続的な発展に必要なことであるという意味で、同様の内容であると考えております。

ちなみに、SDGsですが、Sustainable Development Goals、持続的な発展の目標とでも訳しましょうか、こういう内容が国連で採択されて、国連加盟国全員が採択しているものでございます。

続きまして、一番右、「3つのシティ」の実現に向けた政策の強化をご覧ください。ここでは東京都が推進する「セーフシティ」、「ダイバーシティ」、「スマートシティ」の「3つのシティ」について、島しょ地域の発展に向けた多くの取組のうち、学校と関連する政策について、抜粋しております。

一つは、地域の魅力を生かした観光振興ですが、大島の海、自然、文化などの地域特有の魅力をいかに大島海洋国際高校での学びの中に取り入れ、発展させていくことができるかといった視点も必要であると考えております。

また、その下の、島しょ地域の魅力創出においては、首都大学東京が行っている「あんど！大島」という観光を軸としながら、島内の地場産業を組み合わせる産業の創出を図る取組などにも協力、関与することで、大学の研究者、学生、企業を目指す方々などとの関係において、多くのことを学ぶことも重要であると考えます。

ここまで述べてきたような人材の必要性や、地域、離島の振興といった観点を、国際的な視野に立ち学ぶことが、大島海洋国際高校の使命であるとの認識から、一番下の育成すべき生徒のキャリア像をまとめてございます。

まずは、海洋人材として求められる専門性の観点から、四つのキャリア像として、左から、船舶航海等で、世界を舞台に活躍できる人材。海洋生物の保全や増殖など、水産資源分野で活躍できる人材。潜水作業などの港湾産業や海洋レジャー産業等を支える人材。海洋に関する諸課題を国際的な視点で考え、解決できる人材。また、これら四つのキャリア像に共通するものとして、広大な海洋を舞台に国際的視野で活躍することができる人材、地域や離島の振興に資することのできる人材というまとめをさせていただきました。

資料2については、以上です。

1枚おめくりください。資料3です。

まず、資料2で御説明させていただいたような人材の育成には、やはり広く海洋の知識を専門的に学ぶ、また、深く学ぶ必要があることなどから、学科の改編が必要であると考えております。

また、その下の表の左側にございますとおり、改編された大学科、海洋国際科の下に、小学科として、先ほど資料2で御提案させていただきましたキャリア像に基づいた小学科を設ける案を検討してまいりました。

さらに、小学科ごとに表頭の項目にありますとおり、教育の方向性、想定される教育環境、想定される大学・地域・他機関との連携、その他と検討してまいりました内容を記載しております。

なお、教育の方向性については、小学科ごとのキャリア像と、卒業後の人材像、主な教育の内容という構成でまとめております。

ここでは、教育の方向性を中心に御説明いたします。

まず上段、船舶運航技術の欄を御覧ください。キャリア像としまして、世界の経済をリードする日本を支えることのできる人材とし、それに必要な能力を身に付け、さらにはそれらを伸ばし、様々な世界で活躍できる人材像、船舶に関する人材像という内容で構成しています。

在学中に5級海技士取得に必要な乗船実習等を行い、筆記試験に合格した上で、卒業後には上級学校等に進学し、当日試験を突破して、海技士資格を得て、船舶運航に関する分野で活躍することなどを想定しています。

主な教育の内容としては、1年次に座学と航海実習により基礎を学び、2・3年次に海技士の受検資格に必要なとなる実習、さらには企業等へのインターンシップで実際に学ぶなど、

将来のキャリアに向けた実践的な学習を行うこととしました。

次に、2段目の海洋生物についてでございます。水産業に関する深い知識と経験から、課題を解決し、将来の海洋水産資源の保全と増殖を担える人材像という内容で構成させていただいています。

将来的には、在学中にはこうしたことの基礎、基本を学びまして、経験して実践していく中で、上級学校へ進学するなどし、将来的には海洋生物の増養殖に関する水産業、海洋生物の資源管理を行うなどの分野で活躍することを想定しています。

主な教育の内容としては、1年次に基礎、基本を学ぶだけでなく、多くの実習や体験を行い、2年次ではそれを深め、3年次では課題研究でそれまでに得られた知識や経験に基づきテーマを設定、探求し、解決策を見だし発表するなどの活動を、集大成として実施するところまで行うといった、より実践的な内容を実施という案といたしました。

次に、3段目の海洋産業でございます。キャリア像として、港湾施設や離島での海洋産業を支え、また、大島を初めとする離島の振興にも寄与する人材といったものを想定しています。

卒業後には、海洋系、土木系、工学系、観光・レジャー系などの上級学校に進学することなどによりまして、将来、港湾を支える潜水土といった港湾管理人材、また、観光を支える観光・レジャー産業などの分野で活躍することを想定しています。

主な教育の内容としては、1年次に基礎的スキルなどを習得させ、2年次にはより具体的な環境下においてその内容を深め、3年次には関連企業等へのインターンシップや課題研究などにより、将来を見据えた学習を実施することといたしました。

一番下の海洋創造でございます。キャリア像として、様々なことを記載させていただいておりますが、いまだ産業に至っていない海洋鉱物資源分野、また、世界的な視野で考えるべき海洋政策の分野など、広く海洋に関わる様々な諸課題に対応できるような人材像を考えております。

卒業後には、海洋系のみならず、海洋系の知識を生かし、様々な分野に進学した後、海洋開発関連、海洋開発に関わる公的機関といった具体的な職業から、そうした人材を育成していくことのできる教員、研究者などの分野でも活躍できるような人材像を想定しています。

主な教育の内容としては、基礎的な海洋問題などの座学はもちろん、実際の海洋での実習、特別講義による海洋への意識の定着と意欲の向上などの後、大学の研究者や最先端の企業人

などとの交流、さらには、最先端の研究や観測などに触れ、大島を初めとした離島振興、世界の海洋問題などの多くのテーマで課題研究を行うこととさせていただきました。

また、右に続いております、想定される教育環境、また、他機関等との連携、その他の欄につきましても御覧いただければと思います。

また、その他の欄では、小学科上段三つの案のところでございますけれども、目指す資格として幾つかの資格を掲載させていただきます。

長くなりましたが、説明は以上でございます。

【出張委員長】事務局から今、説明がありました。

前回、2回目のときに、少しキャリア像を示したのですが、非常に御意見いただいたので、それを基に今は作業部会の方でもんで、具体性を、足りない部分だとか加えながら今回つくって、非常に多岐にわたって細かいので、この辺どうなんだとかいろいろ御意見とか、御質問があるのではないかなと思いますので、順次出していただければと思っております。

今日は、これが確定するのではないんですね。

【事務局】はい。

【出張委員長】いろいろ御意見いただいたのを基に、もう一回作業部会等でもんで、次回に基本理念と同じような形で確定していけるかということですので、いろんな角度から御意見を頂戴できるとありがたいなと思います。

いかがでしょうか。

国の方の動きも捉えながら、それから、東京都が目指しているものも踏まえながら、資料2の方では、ここを基に、どんなものを大島海洋国際高校でやればいいのかということで、育成すべき生徒のキャリア像、四つの柱にしてまとめてきています。

それを基に、資料3の方で、小学科としてこういう学科がいいのではないですかという案を示しているわけでございます。

私からすみません、事務局に少しよろしいですか。

【事務局】はい。

【出張委員長】資料3の教育の方向性のところで、キャリア像、卒業後の人材像、主な教育の内容とありますよね。そこの船舶のところでは、2・3年次に「特別講義等」というのが入っているのですが、これ、ほかのところは何か、海洋生物だと東京海洋大学とかそういうところと何かやると書いてあるのですが、これは漏れてしまっているのですか。あるんです

よね。

【事務局】 はい。

【出張委員長】 もし漏れている、議論が深まっていないようでしたら、その辺少し作業部会の方でも、入れていくといいかなと。

【事務局】 はい。

【出張委員長】 海洋産業のところも何かその特別講義が入っていないので、この辺もそういうのがあるのではないかなと思うので、入れてもらえるとありがたいなど。

【事務局】 はい、確認します。

【増渚委員】 資料3ですけれども、船舶運航技術とか、生物、産業と、ここら辺は何となくこの内容とかキャリアと名称は一致するかなと思うのですが、海洋創造というのが、キャリア像を見ると海洋政策とかそういったのがあったりして、技術的なことではなくてというのは何となくわかるのですが、海洋創造のこの創造というのが何かこのキャリア像とか内容だとかというのから、何か少しぴんとこないところがあるのですが、ここの内容をもう少し具体的に教えていただいてもいいですか。

【事務局】 海洋創造の部分というのは、今、資料2の意見書のところでも触れられているんですけれども、例えば、破線の部分の最初の丸、まだまだ産業になっていない、日本の中では産業になっていないような部分であるとか、また、埋蔵しているであろう海底の鉱物資源の類い、そういったものを今後、海洋産業として発展させていくために、どうしたらいいかというような視点から、未来志向で創造というような名前にさせていただいています。

ここも海洋探求であるとか、海洋創造であるとか、学校なので探求の方がいいのではないかと、そうすると、ここは探求なくていいのかとか、そういうこともありまして、今のところ案としては海洋創造という名前にさせていただきましたが、将来に向かってやっていくような海洋鉱物資源の類いであるとか、将来的に海洋政策をどのようにしていくのかということを考えるようなことをテーマとして取り上げるという観点から、名前を創造という案にさせていただいているところです。

【出張委員長】 どうでしょう。何かイメージが湧かないですか。

【増渚委員】 そうですね。その海洋と、この創造というのが、何かうまくくっつかないなという感じで、感覚的で申しわけないのですが。

【出張委員長】 いいですよ。

【事務局】受検生とかが見て、わかりにくいですからね。わかりにくいとちょっとやめた方がいいかもしれないですね。

【出張委員長】ちょっといい言葉が何かあれば。参考になれるような言葉で、この中でも出していたら、多分、作業部会の方もやりやすいのかなと思うんですけど、どうでしょう。

【山寺委員】私はこの作業部会の中にも入っていて、この中身については理解しているので、この海洋創造って確かに少しわかりづらいところはあるかなとは思いつつ、中身を検討しているので、今現在、小学科名をどうするかというのは、ぱっと出てこないのですが、今後、検討はしていく必要があるとは思っています。

【出張委員長】もう少し何か、丹羽委員、いかがですか。少し御示唆いただけるとありがたいんですけど。

【丹羽委員】その海洋創造というのは、海のことを全般的に全てに対応できる人材というものを目指しているのかなと思いました。

そういう人材って今は余りいないので、海洋創造でも、私はすごくしっくりはくるのですが、でも、確かに全く知らない人を見ると少し混乱するかなというのは。受検生なんかは、混乱されるかもしれないですね。

【出張委員長】やはり受検される中学生、その保護者の方が、これはこんな感じかなというのがイメージできる方がいいですよ。その観点で多分、創造って何なんだというのが出てくるのかなと思いますけれども。

ほかに、どうでしょうか。

どうぞ、お願いします。

【田島委員】私もこの創造に関しては、少ししっくりこなくて。ただ、実際に教育内容を見ていくと、全て実習か研究というのが主じゃないですか。特に、3年生なんかは全部研究なんです、課題は。ですので、海洋研究でもいいのかなと少し思ったんですけど。

【出張委員長】海洋研究ね。なるほど。ありがとうございます。

どうぞ。

【田島委員】少し根本的な話なのですが、今、海洋国際科があつて、海洋系と国際系がありますと。その二つを、この四つにするという認識でよろしかったでしょうか。

【事務局】私が答えるより、もしかしたら学校が答える方がいいのかもしれないのですが、

今でも実はこれに近いような学習をやろうと取り組んでいます。

特に、上の三つについては、それに近い内容に取り組んでいるということは、田島委員であればご存じのことかなというふうに思いますけれども、これははっきりと打ち出してやっていく、そういう人材を目指させていくというのを明確にする意味で、しっかりと分けたほうがいいなというふうには思っています。

また、一番下は、ややもすると保護者の皆さんから国際系と捉えられるのかもしれないんですけども、海洋のことをしっかり深く学んで、社会に貢献するための小学科として設けていますので、ここ、国際系というよりは、広く国際的視野に立ってさまざまな海洋問題を学ぶというふうに捉えていただければなど。

ですので、現在の学校の発展、進化と考えていただければというように思います。

【出張委員長】 よろしいですか。

今まで、前身に海洋と国際があった。それを、こういう小学科四つにして、非常に海洋が前面に出てきている感じがあるのではないかなと思って、そういう御意見があつてということではないかなと思うんですけども。

どうぞ。

【田島委員】 すみません、何かいろいろと。

発展的に四つに分けるとするのはすごくいいことですし、実習内容とか教育も、こういう免許を取るとか、すごく今よりも専門的なことがあるんですけど、逆に先生に聞きたいのが、やはり専門的なことになると、先生が必要だと思うのですが、これ以上、多分これからプラスアルファしていく形なんですか。

【出張委員長】 これはどうですか。

プラスアルファというのは人数ということで。

【田島委員】 そうですね。やはり専門的なことをやるので、それは専門性の先生が必要なのかなというように思ったのですが。

【出張委員長】 では、その辺は委員にお願いします。

【山寺委員】 はい。ここの内容を、教育課程を編成して、授業に落とし込んでいったときに、現有の教員でやっていくのか、少し教員が増えるのかというのでは、中身は少し変わってくると思います。

【事務局】 作業部会の中でそういう話も当然出のですが、資料4で触れさせていただいて

いるんですけれども、教職員等の確保・育成、必ず全て教員でやるのか、職員でやるのかといったことを含めて、今後の検討課題だというように認識しています。

【出張委員長】今、委員から言われたのは、現状でこういうことができるのかという、そういう心配があるわけですね。

【田島委員】そうですね。

【出張委員長】だから、方向性を検討した中で、そういう体制などについても、今後というか、この御意見を基に、教育委員会で今後練っていくという形になるんですかね。この報告をいただいたところで。

でも、現状でも、これはかなりできるのではないですか。

【山寺委員】できるところと、できないところとありまして、例えば、わかりやすい話をすれば船舶運航技術のところの1段目ですね。その他に資格が書いてあって、5級海技士って書いてあります。一番右側ですね。その船舶運航技術のところに。

今であると、本校はその海技士資格の養成施設になっていないので、そうすると、この5級海技士を卒業と同時に取らせるということではできないので、もしこれをこういう形で養成施設とするならば、養成施設となる認定を受けなければなりませんし、あと、教員に海技士資格を持った教員を一定程度そろえておかなければ養成施設に認められないので、その辺りの条件整備が必要になってくると思います。

ただ、今現在は、海技免状に関してはどうしているかということ、生徒が筆記試験、養成施設になっていないので、国家試験を自ら受けに行くという形で対応しています。

【出張委員長】ほかの二つはどうなんですか、これは。一番下辺りは。

【山寺委員】1級小型船舶操縦士は、学校の中でやっています。養成施設としてやっています。

【出張委員長】レベル感はいろいろあるのですが、現状の中でも一応やれるであろうものは一応入れているんですね。

【山寺委員】はい。

【出張委員長】今言った5級海技士辺りですと、そこで全部やるためには少し大きく変えなければならぬけど、試験を受けに行ったりするための勉強などは、学校の方で講習とかやりながら、受けに行かせる体制はとっているとおっしゃっている。

そこは、今後の体制の中で、それを進めていくのか、それはこれから議論していくという

形なんですよ。

そのような説明でいいですか。少しそういう心配があったということで。

同じように、この辺の資格などで入れているのは、海洋生物のところの、これも検定とかというのは、通常やってないんですか。

【山寺委員】栽培漁業技術は施設の今は壊れてしまっていて、できなかつたりするところがあるので。

【出張委員長】そういう施設の問題はあるかもしれないですけど。その辺少し委員に説明してもらいたいと思います。海洋産業はどうなんですか、これは。

【山寺委員】海洋産業ですと、1級小型船舶操縦士は学校の中でやっています。特殊小型船舶も同様に学校でやっております。あと、潜水技術検定もやれているのですが、潜水士については、これは独自で勉強して、国家試験受けに行く。独自といっても、授業の中で一定程度やるのですが、学校では出せない仕組みです。

【出張委員長】全国でも、どこでしたかね、岩手の方かどこかに、1か所ぐらいあるんでしょう。

【山寺委員】種市高校でやっていますね。

【出張委員長】種市ね。あそこは潜水士までやっているんですよ、確か。違いましたか。

【山寺委員】潜水士は国家試験の、ペーパーのライセンス試験ですので、うちからでも受けには行けます。

【事務局】非常に特殊な施設、設備がある学校ですね。

【丹羽委員】種市高校は我々も何度か行ったことはあるのですが、あそこは潜水士用の25メートルぐらいのプールで、深さが十何メートルある施設がありまして、そこで潜水士、実習をやっているのですが、大島海洋というのはそういう……

【出張委員長】そういうのはないですよ。

【山寺委員】かつては10メートルの潜水タワーというものがありませんでした。直径3メートルぐらいでしたかな。そのぐらいのタワーがあったのですが、今は老朽化で全部撤去し、それがありません。

【出張委員長】ですから、今聞いていただいております、そんなに無理なものを多分書いているわけではないと思いますので、やっていくということはできると思います。あと、その辺の体制をどうとっていくかなのではないかなと思うのですが。

そのように、いろいろ御質問いただけるとありがたいですが、いかがでしょうか。

【初宿副委員長】少し視点を変えての話になってしまうのですが、今、私たちがこうやって議論していることというのは、今の大島海洋国際を更に充実、発展させていこう、そのために変えていきたいということで、理念からやっているわけなのですが、これから大島海洋国際高校に入りたいなとか、目指す方、それから、在校生もそうなんですけれども、何がどう変わるのと。

今回、私たちがこうやって議論をして、いろいろ詰めていっているわけなのですが、では、具体的に、あるいは、変えようとしている特徴って何かというふうに見たときに、少しわかりにくいなど。

議論されている、あるいは、作業部会で議論された過程の中で、皆さん頭の中に入っているかもしれませんが、今、例えば資料3にあるような事柄というのは、現在の大島海洋国際高校と何が変わったのと。

つまり、どういう特徴があるのというところを、わかりやすくしなければいけないなど思っているんです。

そこをきちんと議論の過程も踏まえて、資料としてわかりやすく残して、今は会議をオープンにしていますけれども、後々にそういう批判に耐えられるように、こういう過程を経てこういう特徴を持たせていきましたというのを、しっかりわかりやすくしておく必要があるんだろうなと思うんです。

その変える特徴というのが、今のこの資料でいくと、例えば、資料の2にあります大きな視点で背景が書いてありますよね。国、国連、そして、東京都全体の課題を背景として、育成すべき生徒のキャリア像というのをつくり上げていった。それに基づいて小学科などを組み立てていったわけですが、一方で漏れているものがあるとすれば、今の大島海洋国際高校でのキャリア上、あるいは、学科上の課題。こういう課題があって、こうして良くしていきたいんだというふうに入れていくと、よりわかりやすくなるのかな。それが恐らく特徴になっていくんだろうと。

これから大島海洋国際に入りたいと思う子供たちにとって、何がどう変わっていくのかなというのが、すごくわかりやすくなるのかな。その辺がわかるようにしていくと、今その他のところで御議論していただいておりますように、どの資格が取れて、どの資格が取れないのか。何でその資格を取る必要があるのか。なぜ学校側としてここを支援していかなければ

いけないのかというのが、より明確につながっていくのではないかなって思いますので、作業部会等で御議論された部分かもしれませんが、是非特徴がわかるような示し方をさせていただくと、よりいいかなと思っております。

もう一つ、気になるのが学校名に国際と付いているけれども、見ていくと、この国際という視点が全ての小学科に網羅されているのか、あるいは、どこかの学科に特徴的にあらわれていく視点なのか。この辺が今少しわからないなと思っておりますので、そういう視点も持って、作業部会で御議論いただければいいかなと思っております。

すみません。少し意見めいたことを申して。

【出張委員長】 どうもありがとうございます。

ただ、作業部会も、ここの委員の方も、今までの流れがあるとどういうふうに変化していったのかわかるのですが、ぱっとこれだけ見ると、前とどこが違うのかという疑問が出てきてしまうので、その辺も踏まえた資料を作っていただいて、ここがこう変わっていくというものが見えるといいのかなというところですかね。

あと今、副委員長からもありましたけれど、海洋国際なので、その国際のところというのが、多分これも前に、1回目辺りであったんですかね。要するに、英語教育とかそういうものは通常でやっていくんだということが出てくるのですが、横串を挿しながらそれでやるというような話が出ていたと思うので、全部にかかっているのかなと私は思っているんですけど、でも、何かこれを見ると、さっきちらっと私も言ったのは、海洋をやるというイメージが少し強くなって、いや、海洋をやるのはいいんだけど、国際はどこ行ってしまったのかなという、そういう意見かなと思いますけれど。

【事務局】 はい。

【丹羽委員】 私の思うところも結構あって、その他のところで、課題研究等と書いてあるんです。ここはぜひ学会等も入れていただけると。学会で発表して、いい発表をした場合には、賞とかそういうものも与えられますので、そういうものは大学の進学の方にも非常に有利に働くと思っておりますので、その辺も是非積極的に学会での発表もしていただければいいなと思います。

【出張委員長】 これもいい視点じゃないかと思えますよね。やはり学校の中だけではなくて、日本の中、できたら世界でもやっているわけですから、大きくそこで国際を使う、英語を使えますよという話にもなってくると思うんですけどね。

これが何か、学校だけでなっていると、やはりこれからは外に出て、他流試合をするというのは大事だと思いますので、学会で発表。国際学会で発表とか、そういうのも理想として入れていかれると、つながるかもしれないですね。ありがとうございます。

【丹羽委員】そういう意味では、もうちょっと言っていていいですか。

【出張委員長】どうぞ、どんどん言ってください。

【丹羽委員】それから、更に細かいことになってしまうかもしれないんですけど、そのSDGsの中にもマイクロプラスチックを含む海洋ゴミ対策の推進とありますけれども、このマイクロプラスチックというのは、日本の国内でも研究者はまだ多くなくて、それほどよくわかっていないんですね。

大島海洋というのはまさに太平洋、外洋域に面してしまっていて、あとは黒潮にあらわれている海域ですので、世界中のマイクロプラスチックが黒潮に乗って大島へ流れる、非常に優れたフィールドであるので、是非進めていただきたいというのと、マイクロプラスチック、調査自体はそれほど難しいものではないのですが、1個1個ゴミを選別していくとか、そういう作業がありまして、それは人手が要るんですけども、高校生がたくさんおりますので、是非その高校生たちに協力してもらって、マイクロプラスチックの調査を定期的にやっただくと、それが国際的にも非常に大きなアピールになると思いますので、是非進めていただきたいなというふうに思いました。

【出張委員長】今、話題になっているマイクロプラスチックという、皆さん、大丈夫ですよ。大丈夫ですか。非常に生態系を脅かしている問題ですから。これはちょっと船でサンプルを取っていくということですね。

【丹羽委員】そうです。船で網を引いて、マイクロプラスチックゴミを採取してそれらを選別していくという作業があるんです。顕微鏡があればできることなので、専門的な機械が要るとかそういうわけではないので、是非取り込んでいただけるといいかなと思います。

【出張委員長】これもできれば、大学と連携させていただいてね。

【丹羽委員】そうですね。それがそのデータを蓄積すれば、それも国際的になります。それこそ、学会とかそういうところでも発表できるということですね。

【出張委員長】できるという形ですよ。そういうこともやられる。それは具体だと、どこかのコースになるんですかね。コースというか、小学科だと。一番最後ですか。

【事務局】海洋創造とか。

【出張委員長】海洋創造のところに考えているんですね。

【事務局】はい。

【出張委員長】だから、その辺に何か少し付け加えていくといいのかもしれないですね、具体的なものをね。

ありがとうございます。

ほかに、いかがですか。

細かいことでもいろいろ挙げていただけると。今日は、ここで決めるわけではないので、この辺の検討をしたらどうかなど。

どうぞ、お願いします。

【丹羽委員】海洋創造のところは課題研究ということで、いわゆる海洋のその、ほかの小学科も課題研究はありますけれども、海洋創造で扱う課題研究というのは、地域の問題であるとか、ほかの研究機関とか、都の連携の下で課題研究というようなことになると思うのですが、こういうときにはやはりそのコーディネートするスタッフがいると、すごくやりやすいと思うので、これは別に海洋のことを専門に、知っていることは必ずしもなくて、異なる組織の間のつなぎ役のような専任のスタッフが配置されると、非常に進みやすいのではないかなというように感じました。

【出張委員長】ありがとうございます。

東京都の「3つのシティ」の実現の中で、その産学連携コンソーシアムを活用するとかありますので、そういうコンソーシアムなどから人材を供給していただくとかというのも、今後あるのではないかと思いますので。貴重な意見、ありがとうございます。

ほかに、いかがでしょうか。

【事務局】初宿副委員長に先ほど頂いた、また、委員長にも頂きました、国際はどこに行ったのかという話ですけれども、確かに資料上、どこを見ても国際という言葉が余りないですし、国際的内容というのがほとんど触れられておりませんが、作業部会の検討、この中においては、世界の海洋問題を取り上げるとか、もちろん、先ほど丹羽委員からもございましたし、離島振興といった問題も取り上げる。そういった中で、最後、探求して発表するときに、論文に仕上げるときに、できる子であれば、英語で論文を仕上げてみるとか、英語でプレゼンをしてみるとか、そのために必要な基礎学力の定着をどのように学校教育等、寄宿舍の中で図っていくのかといったことについては、多少の議論はございました。

ただ、まだ現状まとめられている状況ではありませんので、次回のときに一定程度まとめて、御提案できればというふうに思っております。

【出張委員長】是非このところをよろしくお願いします。

【事務局】はい。

【出張委員長】何かございます。いいですか。

どうぞ、お願いします。

【田島委員】質問を幾つか。

質問というか、細かい話かもしれないですけど、船舶運航技術、キャリア像のところ、丸の4番目なんですけれども、「情報を適切に収集して把握し、自分なりの意見を持ち、自分の意見を分かりやすく合理的に説明できる人材」というのは、キャリア像なんですか。

【事務局】船の中において、危機迫るような場面があると思います。そういった面において、例えば極論、船長が間違っただん判断をして船が沈没するとかいったことがないように、どういう場面においても、それぞれの職務において、果たすべき役割をしっかりと認識し、周りの状況を見ながらきちんと説明できるような人材が、船舶のキャリアとしては必要だという意味合いからこういうふうに、少し桁の違う話に見えたかもしれませんが、伝えさせていただいたところでございます。

【田島委員】そういうことですね。

【出張委員長】よろしいですか。

でも、何かすごく鋭い部分を突かれたような気がするのですが、これ、確かに言われてみると。

【事務局】ちょっと検討してみます。

【出張委員長】ほかのところにも言えてくるかもしれないですよ。特に、海洋研究などの辺りはね。

【初宿副委員長】ちょっと細かいところで恐縮なのですが、今、話のありました資料3のところのその他のところで、それぞれに目指す資格というところで、具体的に書いていただいたじゃないですか。ところが、一番下のところ……

【出張委員長】ないんですよ。

【初宿副委員長】わかるんですけども、ここでは資格は取れないのかという、素朴な疑問も出るのですが、なかなかこの海洋創造、あるいは海洋研究とか、そういった中で高校卒業

レベルでの資格というのは難しいかもしれないんですけども、例えば、大学進学した後の先に待っている資格とか、卒業後すぐではないけれども、取得されるであろう資格、目指せる資格というのがあると、子供たちに少し明確な進路として示すことができるのかなと思いますが、その辺は恐らく作業部会で御議論していただいた後の結果だと思うので、難しかったですと思うのですが、何か委員の皆さんの中で思われるもの、想像されるものがありましたら、丹羽先生も御専門でいらっしゃいますでしょうから、いかがでございましょうか。

【出張委員長】事務局の方が、やはりここは悩んだところなんですかね。書かれていないので、私もここだけないなと思って見ていたんですけど、どうですか。

【山寺委員】ここの授業の中で資格取らせるとなると、それに時間をとられるというか、その授業を組まなければいけないですよ。簡単にすると、専門の教科をそこに置かなければいけない。

したがって、こういう創造的なことで、いまだ解明できていないようなことを研究していたりとか、そういうことに関わろうとする高校生は、上級学校に行つてほしいというのが、私としては狙いとしてはあります。

その中で、上級学校に行つて、大学に行けば、小型船舶は取れるとか、そういうことというのは、少し次元が違って、大学で小型船舶を取るのにはボートスクールなどに行つて取ってもらえればよいと思っています。

【出張委員長】どうぞ。

【初宿副委員長】決して無理して資格を入れてほしいということではないんですけども、何かあればという思いがあったのですが、やはり特徴としてはこの資格だけを見ていくと、ああ、一番この海洋、ここで言うと創造が、大学進学なのかななんて、決してそうではないんだと思うんですけども、そこが色濃く出るかななんて思ったのですが、やはり資格というところまですると、無理がある。示すことに無理があるという理解。

もし出せるのであれば、作業部会でも少し御議論いただいて、アイデアを頂ければなと思います。すみません、少しまとまりのない話で、恐縮ですけども。

【出張委員長】今、ここの委員の皆さんで、例えばこういう資格があるのではないかという、御示唆を頂けるとありがたいのですが、いかがですかね。

例えば、違うなら違うと言つていいのですが、先程も学会で発表する、国際学会でも発表するということ、やはり英語が必要ですね。

そうすると、例えばスピーチだってしなければいけない。英語でスピーチしなければなら
ないのであれば英検1級を取らせるとか、何か海洋のあれがすごくあるけれど、もっと広く
捉えられて、何か持っていないと、書くといったってそんなに簡単に書けないですよ。だ
から、そういう資格とか、やるんだというのを明確に入れておいた方がいいのではないかな
と思いますので、少し例として余りよくないと言われるかもしれないけれど、英検何級取ら
せますよとか、そういうのは資格ですよ、立派な。

それは国際学会などで発表していくための素地として、普通教科の方でやっていくんだと
か、そういうつながりを持っていったいいかなと思うんですけど、そのような資格か何か
ないですかね。

【田島委員】資格でなくても、何とかって認定とか。

【出張委員長】認定というかね、うん。いろんな最近つくられていますよね。歴史検定とか。
いや、歴史は入らないけれど、海洋検定とかそういうのはないんですかね。何かそういうも
のも少し調べて、作業部会の方でまとめてください。

何かあります、事務局。

【事務局】ここが一番下のところなのですが、これは作業部会の中で議論をしたわけではな
いんですけども、私のセクションのところで話をしているときに出たんですけども、や
はり元々の学校の海洋系、国際系の素地がありますので、今の海洋系、国際系が間違ってい
るかという、決してそんなことではなくて、初宿委員の方からも言われたとおり、今の海
洋国際高校について、一番課題となっているのは、明確な理念がなかったり、明確なキャリ
ア像がなかったりすることによって、学校の教育がどのような方向でやったらいいかとい
うのがぶれていく。この10年の間でぶれてきた。この先もぶれる可能性がないとは言えない。
また、そういうことであれば、国の施策や都の施策に基づいて、しっかりとしたもの構築
して、都教委として学校のミッションを明確にして進もうというのが、この趣旨だと思っ
ています。

そうすると、一番下のところというのは、実は国際系がしっかり海洋国際高校の学びをや
るんだというような意思表示なのかもしれないという思いもあって、その中においては、こ
の海洋創造という小学科、これは学校と作業部会で話をしながらこういう案を出しましたけ
れども、例えば、海洋国際創造ではどうなのかとか、ここは水産学科で本当にいいのदारう
かということも、多少はありました。

でも、一方で、結論としてはやはり水産の学科、国が定める大学科の分類としては、水産の学科で行うことで、その中で多くを課題探求とかの時間に割く、科目としてはですね。教育課程表に落としたときには、課題研究の時間が多いというような学科で、先ほど丹羽先生、田島委員がおっしゃられたようなことを考えてやっていくというようなことを想像しています。

ですので、そういう意味では、丹羽委員から御提案のあった学会への発表とかいうことになる、文章に関する能力検定であったり、委員長からもありましたような英検であったり、そういう資格認定というのはあってもいいのかなというふうに思います。また、プレゼン大会とか。

【出張委員長】そうですね。そういうのはありますよね。

【事務局】そっち系のことに参加して、賞を受賞するんだとかという意気込みがあってもいいのかもしれないなというふうに、ちょっと今、私のジャストアイデアですけども。

【出張委員長】ちょっとその辺の資格というか。

【事務局】はい。作業部会で議論させていただきたいと思います。

【出張委員長】目指す資格等、ここだけないのも寂しいです。やはりここはこういうのを目指すよというのを示してあげた方がいいのではないかと思うので、少しまた検討してみてください。

その他、どうぞ。

【増淵委員】今少しこの学科を見ていたんですけども、これって入学の段階からこの四つに分けて、募集の段階から四つに分けることを考えているのか、それとも、入学の段階は海洋国際科って一括りにして、例えば、2年生あたりで分けていくことを考えているのか。現段階でどちらでお考えですか。

【事務局】両方とも考えたのですが、やはり1年生のときも同じ教育をやってしまうと、一つは専門性が、3年間で学ぶ専門性が少し足りなくなる可能性があるということ。あと、もう一つは、ほかの専門教育学科、専門学科でも同じようなことが言えるのかもしれないんですけど、特に、海に関する学科、海洋に関する学科ですので、常に生死の危険が伴う。その、生死の危険が伴うような学科に、どこに行こうかなと思うような意識で入ってきてもらうと危険なのではないかというような議論もありまして、一つは専門性を深く学ぶ観点、一つは明確なキャリア意識を持って入学し、卒業後もそこに進んでほしいという観点から、最

初から小学科で募集することを今は考えています。

【出張委員長】 よろしいですか。

この辺はちょっとまだいろいろと、こうなったらいろいろ考えなければならないことは、今、何学級なんですか。

【山寺委員】 1学年2学級です。

【出張委員長】 2学級ですね。そういう問題も多分、今後。少しわかるように言った方がいいのか。2学級ということは、今80人でしょう。

【山寺委員】 80人。1学年80人です。

【出張委員長】 80人ですよ。そうすると、1学級を専門に学ぶときだけ分かれるような、1年次からなっていくような、カリキュラムを作っていかなければいけないということですよ、簡単に言うと。

でも、こちらの四つの柱で今やったらどうですかということをご提案してもらっているんですね。

【事務局】 コースとか類型とか、そういうのも考えたことは考えました。

一番後ろに参考資料が5枚目で付いているんですけども、他校の状況、これ、前回の検討委員会のときに学校の規模がわからないので、規模がわかるものということで用意させていただいたんですけども、単に規模がわかるだけだといけませんので、他校の状況はどうなのかというのがわかるように、表にさせていただきました。

【出張委員長】 これを説明してください。

【事務局】 はい。例えば、福井県立若狭高校、一番左上ですけども、ここで普通科、国際、理数、海洋科学とありますけれども、基本的に海洋何とか、水産何とかとなっているものについては、基本的に学科は全て国の区分でいう学科の名前は、水産学科です。でも、水産学科と言っているところは1個もありません。普通科、国際、理数などとなっているところは、そのとおりの学科名でございます。

見ると、主に普通科であったりするところが、40人の学級です。あるいは、神奈川県立の海洋科学、ここも40人の学級です。

あとは、やはり県立はどうしても40人学級になるんだと思うんですけども、右側の6、7、8のところを見ていただきたいと思うのですが、実際にはこれ、定数に満たなかったという部分もありますけれども、後にコースに分けている学校というのがあります。

新潟県立や、三重県立の水産高校などというのは、1年次は大きくくりで二つに分けて、例えば、三重県立ですと、大きくくりで最初に二つに、これは要するに、船舶系と海洋資源系なんですけれども、この二つに大きくくりで分けた後に、またさらにそこで細分化して、2年生からコース制度をとっている学校です。これは今の現状のうちに近いのかなと思います。

また、新潟県立海洋高校とかというところは、最初全部一緒にとって、後で分けています。こういうやり方もあるようです。

様々な学校のやり方はあるんですけれども、現時点ではうちは茨城県立海洋高校にあるような、最初から小学科でとりたいた。

先ほど、委員長の方からありましたけれども、これ、資料4でも課題として取り上げているのですが、4小学科、資料4の一番上の学級規模のところを取り上げているんですけれども、学級規模、それから学校名、学科のところを取り上げておりますけれども、特に、学校名、学科の4行目、「小学科ごとの人数については、引き続き検討することとするが、ホームルーム活動などの学級規模は小学科の構成を考慮しつつ、35人学級とすることを想定」としています。

この辺については、今までの都教委の中でのルールというか、ルール化されていない当然のことみたいなことに合致していないので、検討課題だというふうにこちらは、作業部会、事務局側としても認識しているところです。

【出張委員長】今まで、専門学科などは、工業とか農業とかは35人で、東京都はやってますからね。

【事務局】はい。35人を更に細分化するということになりますので。

【出張委員長】それだと、国際……

【事務局】コースのようにして、やっているところはやっています。

【出張委員長】コースでやっているのは、やっているけれど。だから、その辺は少しこれから検討していかなければいけない。四つの小学科でいくのであれば、その組み方とか。

ということなんですけど、いいですか。

ほかに、いかがですか。

どうぞ、お願いいたします。

【江藤委員】伺っていて、1点。これまでの大島の海洋国際高校と大きな違いというのが、先ほどから出ていますけれども、いわゆる国で言う水産学科にすること。ここが人事的な発

想をすると、全然取り扱いが変わるので、そういう受け止め方でよろしいのですよね。

【事務局】今のところは水産学科を志向しています。

【江藤委員】わかりました。そうすると、表題では最初に、海洋国際科、これは名前は変わっていないけれども、水産に関する学科にする。恐らくそれは明確に示した方がいいのではないかと思うんです。ただ、意見です。

【出張委員長】そうですね。全然違ってしまふところなんですよ。配当基準とかもみんな変わってくるから。今までは国際学科。

【事務局】国際に関する学科です。

【出張委員長】だから、定数というか、1学級の定員も40人でやっていたけれど、水産になってくると35人。

【江藤委員】それだと専門学科というような取扱いの中に入れるという判断をするわけですよ。

【出張委員長】ほかに、よろしいですか。いいですかね。

それでは、いろいろ見ていただいて、御意見が出ましたので、事務局の方でまたまとめて、作業部会等で更に練っていただいて、次回また御提示いただければと思いますので、よろしくをお願いします。

それで、次は次第の、少し先ほどからも話に出てきているんですけど、次第2の議事の(3)学校の基本的な枠組みなどについてということで、話を進めたいと思いますので、先ほど大島海洋国際の今後の教育の方向性について御議論いただきましたが、作業部会におきましても、こうした教育の方向性に基づいた学校の基本的な枠組みを引き続き検討する必要があり、またその辺について検討してきたものがあると思うので、それについて御説明を頂ければと思います。

【事務局】はい。それでは、資料4を御覧ください。

まず、上段に学校の基本的枠組みの素案を記載させていただきました。学校の基本的枠組み素案から御説明を申し上げます。

まず最初、【設置場所】でございますけれども、設置場所については、現在の位置を基本としまして、今後不足することも想定されている、実習施設や寄宿舎の在り方などについても、検討の中を含め、更に検討していく必要があるという認識でございます。

また、学級規模についてですが、現状の施設・設備の状況、それから、現在の入学者選抜

の応募倍率の推移などから、1学年2学級規模、合計6学級としたいと考えております。

ただし、学科名の変更は行わないものの、先ほど江藤委員からもありましたが、大学科の内容を国際から水産に変更したいとの旨に伴いまして、1学級当たりの生徒数については、40人から35人へ減じて実施したいというように今の時点では想定しております。

なお、今後の入学者選抜の応募倍率の状況などを踏まえまして、施設・設備の改善などの際においては、規模の変更も検討することと記載をしております。

次に、学校名についてですが、学校名については既に定着していることもありますので、変更はせず、学科についても、先ほど申し上げましたとおり、学科名は変更せずに、学科の分類を水産に関する学科に学科改編をした上で、四つの小学科を設ける案としてございます。

ただし、1学級当たりの人数が、先ほどのお話にもありましたが、35人と想定していることから、ホームルームなどの学級単位での活動をどのように行うのかも含め、小学科ごとの人数を検討していくことが必要なのではないかと考えてございます。

次に、開校予定年度ですが、開校予定年度につきましては、改編後の学校をなるべく早目に示したほうがよい、また、入学を希望する生徒の、入学前準備期間を確保する必要があるなどの観点から、改編時期を2020年4月、1年生受け入れ開始の予定で検討を進めております。

また、その下に六つ記載をしておりますけれども、今後も検討を引き続きすべき事項、これはこの検討委員会で結論が出るというようには現時点では考えていないんですけれども、更に検討を進めていく必要があるだろうという事項といたしまして、六つを挙げています。

それぞれの項目について御覧いただきまして、御議論を頂きながら、次回の検討までに作業部会にて少し議論をさせていただいた後、それぞれの項目について、委員から御意見のあったものについて、まとめた方向性のような感じで検討委員会の報告書等には記載をしていき、4月以降の検討でまた更に深めるというふうにしていきたいというように考えております。本日は考え方についてのみ御提示させていただくものです。

なお、先ほど少し説明をさせていただきましたが、5枚目、参考資料で、学級規模等に関する参考資料を付けさせていただいてございます。ここを少しだけ御説明いたしますと、先ほども説明をいたしましたけれども、例えば、1番の福井県立若狭高校、ここは普通科が37人学級だそうです。国際、理数、海洋科学科、これについては、28人の2学級ということで運営をしているとのことなんです。

また、5番の三重県桜丘高校は、これは私立ですので、私学として運用しやすい人数で実際は運用しているということでございます。

また、京都府立海洋高校についてですけれども、ここも募集の段階では大きくくりで95人を募集いたしまして、その後、生徒のニーズ等を聞きながら、実習等ができる範囲で人数配分をするというようなことだそうでございます。

説明は以上でございます。

【出張委員長】ありがとうございました。

事務局の方から、教育の方向性に続いて、学校の基本的な枠組みや引き続き検討が必要な事項について検討してきたのを今、資料4に基づきまして、報告をしていただきました。

この部分につきまして、御意見、御質問ありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

まだまだ素案ですよ、これは。

【事務局】はい。

【出張委員長】こういう課題もあるよというものも含めながら、作業部会の方でまとめてきたという捉え方でいいですよ。

【事務局】はい。

【出張委員長】だから、この辺の観点が抜けているんじゃないかとか、そういうのも出していただくとありがたいと思います。

お願いいたします。

【田島委員】多分御存じだとは思いますが、基本、生徒が主体のドミトリーですので、その辺は少し学校との教育と連携しながらというところは、引き続き検討しないと、生徒主体でやっているところがもったいないのかなという気はするのですが、少し検討していただければと思います。

【出張委員長】ありがとうございます。

寄宿舎教育のところですね。

【田島委員】はい。

【出張委員長】学校での教育と連携しながらという、そのところをせっかくの売りでもありますから、今までより一層の強化を図っていただいて、子供たちの進路実現ができるように、24時間面倒を見る学校ですからね。

今は何か生徒主体と言っていましたけれども、やはりきちんと先生方で一緒にやれるような体制をとれるといいですね。

ほかに、いかがですか。

【田島委員】これは今、先生は全部入っているんですか。先生はドミトリーに全員入っていましたか。

【山寺委員】宿直の教員は2人です。

【事務局】なかなか全国的にも寄宿舎のある学校というのが少なく、そういった中で第1回検討委員会の際に、参考資料の5番にあります三重県桜丘高校、私学ですけども、ここを視察に行っていました。

ここでは、不登校経験者等を受け入れて、学力を非常に伸ばして、難関大学に入学をさせていくというような実績を持っている学校で、そこの一番の売りが、寮教育ということになっています。

そこで、どんな教育をやっていくかという、実際に田島委員がおっしゃるように、子供たちに委員会制度を持たせて、自主運営をさせる。その中で、教員から与えられた課題を日々こなし、その課題について、翌日朝学習で15分程度の小テストを行うと。そういうことをすることによって、基礎学力の定着、学力の向上に寄宿舎における学習で、また寄与している。

一方で、昼間の学校での部活動とは違う活動を、寄宿舎で行わせて、寄宿舎生活が充実するようなこともやっているようでした。

その辺りのことを参考にさせていただきながら、大島海洋国際高校において、寄宿舎教育、どのようなことができるのか。現在のような体制、あるいは現在のような施設をいつまでも続けるのがいいことなのかどうかも含めて、在り方そのものも考え直していきたいというように思っています。

【出張委員長】ほかに、いかがでしょうか。

どうぞ、お願いします。

【丹羽委員】大島丸に関してですけども、ここに書かれているように、広い海洋調査ができるような船につくり変えていくというようなことになっているんですけど、ぜひ海洋、実習船ですけども、その海洋教育もできる船というような観点からも、例えば、教員研修をするであるとか、あるいは、大島海洋以外の生徒も乗船できるようなそういう機会をつくっ

てもらおうとか、そういうようなことも考えていただけると非常によろしいかと思えます。

【出張委員長】ありがとうございます。

教員の研修で活用できないかとか、他の学校の生徒。そうですね。

【丹羽委員】そうです。

【出張委員長】船で学ぶとか、そういう機会があってもいいのではないかというね。

何か、いかがでしょうか。大丈夫ですか。

ここは少しまだ、これからもんでいかなければいけないところなので。どうでしょうか。

項目として今後の必要な事項って、大きく七つ出ているのですが、この辺もこれでいいですかね。よろしいですか。

何かあります。

【山寺委員】ここも話ししていくと、その施設・設備的なものとか、そういったものも一定程度出てくるかなとは思っています。

【事務局】開校の予定年度等もありますので、現行の施設でどういうことができるのかとか、あるいは、地元漁協さんなどと協力をしながら、どういうことができるのか。あるいは、次期、大島丸を使って、現在は大島丸を航海実習のみでしか使って、航海実習と中学生の体験航海でしか使わないんですけれども、停泊中の実習船を使った実習であるとか、そういうことも含めて、できることは実践していきながら、しかるべき時期が来たらしかるべき施設についても検討しながらというようには考えているところです。

【初宿副委員長】この資料4の今後の取組の中で、十分かなと思いつつも、今ほかの資料、例えば、資料3、ここで言う海洋創造というのと見比べたときに、大学という視点が出てくるが、高大連携、高校と大学との連携、こういった視点での切り口を用意して、基本的な枠組みの中に折り込んでいくと、大学の研究機関、あるいは子供たちが大学と一緒に将来の大学進学を見据えながら教育ができるのかな。大学との連携という部分を一つ入れるといいのかなと思いましたが、いかがでしょうか。

【出張委員長】どうですかね。

何か、どうぞ。

【増淵委員】教職員の確保・育成のところですけど、専門性を高めていくというと、やはりその専門性を高めるための教員の資質向上というか、そういう研修のようなものがやはり必要になってくるのだろうと思うんですけれども、今も専門教育の向上研修のようなものをや

っていますが、こういうように学科を変えていったときに、これはあくまでも学校側としての願いみたいですが、どういう形で教員研修をもっと充実させていったらいいのか。

多分、これ、やっていくと必ずそれがその後問われてくると思うので、少し、現段階でのお考えみたいな、もしあれば。

【山寺委員】一つには、この産業的なことを教育していくに当たっては、民間企業を活用させていただくのがいいかなとは思っております。

その中で、例えば船舶の運航に関することであれば、それは船会社が幾つかあったりとか、教育的に船員育成しているところもありますので、そういったところであったりとか、そういう教育機関や大手の民間企業だと、講習会そのものを会社がやっていたりとか、少しお金はかかるのですが、活用したいと思っています。

あと、潜水関係も、一定程度やはり外に出ないと、学校の中ではどうしても技術を向上させるというのには限界があるので、そこも一つ工夫が必要になるのかなとは思っています。

【出張委員長】あまり研修センターの研修は使わないという解釈でよいですか。

【山寺委員】使いづらい。

【出張委員長】使いづらい。民間企業などと連携してやっていく。工業などでは企業研修なんかをやっているんですよ。工業の先生が行って、技術を磨いてくる。そのような形になるのではないかという提案ですよ。その辺を今後詰めていくと。

【事務局】よろしいですか。

先ほども申し上げましたが、この資料4のところについては、最後、検討委員会報告にまとめていくときには、恐らく検討の結論が出ないと思います。ですので、今増淵委員に御提案いただいたような内容についても、委員からこういう御提案があったとか、作業部会でのこういう議論があったというような形で留めることになるのかと思います。それを受けて引き続き、それぞれのセクションで御検討いただくことが肝要なのかなと事務局としては考えているところです。

【出張委員長】先ほどから何回も言っているんですけども、7項目ありますけれども、それ以外でこういう観点のところも今後考えていかなければいけないよと言っただけだと、この辺盛り込んでいけるかなと思っているところですが。

【丹羽委員】先ほど高大連携という話がありましたけれども、去年東京大学の方でも大学院生が20名ぐらい大島海洋に行かせていただいて、小型船舶を使って高校生と海洋調査をや

ったのですが、今回は単発でやらさせていただいたのですが、今後はこういうような取組が継続的に行っていくことを想定して、対応できる施設というか宿泊施設とか、実習施設とか、そういうものがあると高大連携を継続してやっていく上で有効なのかなと思いました。

【山寺委員】 高大連携につきましては、昨年東京大学の学生、教員と来ていただきましてありがとうございました。これについては、私の考えとしては、今後も単発ではなくて、継続性のある計画的な高大連携にしていきたいと思っていますし、東京大学だけではなくて、海洋大学、首都大学とも進めていけたらと思っています。それで、その時に生徒が何人かいて、私が生徒と会話をする機会があったんですけども、大学院生達と触れ合うことによって、敷居がとても高いようだったのですが、少し下がったというようなことは言っていました。

【出張委員長】 そうですね。積極的にいろいろなところとやっていければいいのではないかと思います。国際というのが頭にあるから海外の水産高校というのはないのですか。これだけ海に囲まれて、アジアとか近くにあるわけで。その辺も少し調べて、そういうところと姉妹校提携して、アジアの中で学んでいくとか。せっかく船を持っているわけですから、あるいはその子供たちに来てもらって交流していくということで、非常に国際色豊かな海洋の学校になっていくのではないかと思います。そういう広がっていくようなことをやれるという面もあるし、日本だけで生きていく時代じゃなくなっていくわけですから、いろいろな地域や国の人と接して、お互い理解しながら、でも水産という資源は限りがあるので、それをどう皆で分配しながら豊かな生活をしていくということを考える契機になるのではないかと思います。

【山寺委員】 水産に関するものは分からないですけども、船員を育成する学校があるとは聞いていますけれども。

【出張委員長】 何故このようなことを言っているかという、都立高校を見ていただいても、工業高校にしても農業高校にしても海外の姉妹校を持っているんですよね。それで、やはり工業の校長先生方と話していると、これからはやはりアジアだと。今、台湾だ、ベトナムだ、そういうところに行きながら、姉妹校提携をしようとして、実際にできてきているところもありますし、農業だとアメリカの学校と提携しているのもう東京の中、日本の中という時代ではなくなっているから、できないことを書くわけにはいきませんが、やろうと思えばできることを書いて、グローバルな社会で生きていくということを示したいので国際という言葉が付いているのではないかと思います。その辺も検討に入れてもらえるとありがた

いなと思うので。せっかくこういう機会ですいろいろな方から御意見を頂いているわけですから。今いる子供たちも大事にしながら、その子供たちが卒業した後にあそこの学校を出たんだと誇りをもって言える。そして、また中学生、小学生があそこに行きたいと言えるような夢を実現したいなと私は思っておりますので、是非お知恵を頂けると。すみません、また私が長く話してしまつて。

他に、ではお願いします。

【初宿副委員長】先ほど丹羽先生が高大連携の中で研究者がいられるような施設というようなお話を頂いたんですけれども、東京大学として高大連携を、大島海洋国際と連携しようとしたときに、大学側として高校側に求めること、高校側でこういうような状況であるならば東京大学としては連携がしやすいよというような、私たちが今後検討する上で参考になるようなお考えがありましたらお聞かせいただければと。

【丹羽委員】まず研究者という立場からすれば、観測船という形で船が使えるという点です。毎年、研究者が乗って観測ができる、そういうような機会を与えていただくと非常にモチベーションになると思います。あと、もう一つはやはり、今回も学生の実習として大島海洋国際を利用させていただいたのですけれども、そういうときに波浮の方はなかなか宿泊施設がないですから、そういう施設があると非常にいいなと。あと、大島は海だけでなく三原山とか、ジオパークなどもありますし、セミナー施設などがあれば利用しやすいなと思いますね。

【初宿副委員長】はい。ありがとうございます。

【山寺委員】今の丹羽先生の船というのは、昨年のクジラの調査のような小型船のことを想定されておっしゃったのか、大島丸を想定されておっしゃったのか。

【丹羽委員】小型船を利用できるだけでも非常にありがたいのですが、大島丸が利用できるとベストだと思いますね。大島海洋の高校生の実習の間の空いた期間とか、あるいは実習と一緒に乗船させていただいて観測できるような機会を作っていただくと非常にありがたいなと思います。

【山寺委員】はい、わかりました。

【出張委員長】はい、いかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、今いろいろ御意見を頂戴しましたので、それを基に学校の基本的な枠組について、さらに事務局の方と作業部会でまとめてもらって、方向性を次回示せるようにして、方

向性というかこういう課題を今後検討していく必要があるという部分をまとめて示してもらえればと思いますので、よろしくお願いします。

それでは次に、最後、（４）その他ですが、委員の皆様から何かございましたら出していただければと思うのですが、いかがですか。よろしいですかね。

今日もかなり、事務局の方で精力的に作ってくれたので、資料が盛りだくさんだったのですが、時間の関係がございましたので、これで終了させていただきたいと思います。

最後に事務局の方から今後について説明をお願いします。

【事務局】はい。次回、第４回検討委員会でございますけれども、現在の予定では３月８日木曜日の１３時から１５時までを予定してございます。場所については、追って連絡をさせていただきます。

また、次回の検討委員会では、本日課題として残された事項及び本日資料４にて御説明させていただいた事項などを中心に御議論いただきたいと考えております。途中、説明をさせていただきましたけれども、第４回検討委員会にて一旦検討委員会での御議論を締めさせていただきますして、その内容を検討委員会報告書として作業部会でまとめて参ります。各委員の皆様には別途作業部会でまとめた報告書の内容について御確認いただきながら、報告書への御意見等を頂きたいと思っております。

また、第５回の検討委員会ですが、委員の皆様の御意見、それに対するまとめた状況などについて御説明をさせていただき、報告書の完了をしたいと思っております。第５回の検討委員会ですが、日にちが短く、恐縮ですけれども、３月２０日火曜日１０時から１１時までの１時間、この時間にて委員の皆様から頂いた内容をどのように反映させたかの御説明をさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

委員の皆様には、第４回での活発な御議論をお願いしますとともに、終了後報告書のまとめまで期間が短く、恐縮ですけれども、御協力いただけますようよろしくお願いいたします。説明は以上です。

【出張委員長】はい、今説明がありました。

次回が３月８日木曜日、１３時から２時間ということでございます。そこで今日議論した内容について作業部会で検討する。第５回は３月２０日で終了でしょ。４回目のところで、報告書にしていくためのプロットぐらいは出るんですよ。

【事務局】そうですね。体系立てのようなものは第４回でお出ししようと考えております。

【出張委員長】そうですね。こういうプロットでまとめていこうというものを出して、時間が短いので、その後作業されて、事前に、何日か前までにお送りするなどして、見ていただいて、それを5回目のところで確認していただいて報告書にまとめようという形をとろうと思っていますので、事務局も非常にタイトな日程ですが、作業の方よろしくお願いします。

本日も御協力いただきましてありがとうございました。

これで第3回の大島海洋国際高校あり方検討委員会を終了させていただきたいと思います。
ありがとうございました。